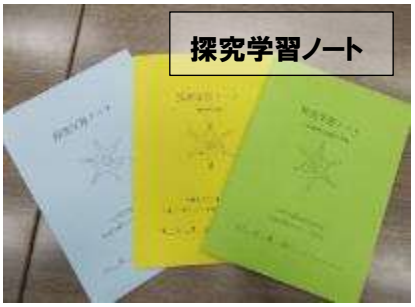
Ａ－ａ　地域理解プログラム

「地域理解プログラム」は１年次の総合的な探究の時間において展開されている。前期（夏季休業まで）は探究スキルの習得を目標として、生徒たちはプレゼンテーションやＫＪ法、ディベートなどに取り組む。後期から本プログラムは本格始動し、「新庄市でできること」を考え、アイディアの実現に向けての方策を探究していく。平成30年度は最上総合支庁から提示された地域課題の解決策を考える学びであったが、分野による課題の難易度の差や最初に課題ありきの視点での探究活動であったために、生徒が地域のマイナス面に着目してしまっていたのではないかという課題が挙がった。そのため、令和元年度においては、当初計画していた前年度の踏襲的な活動を見直し、「地域の可能性」に着目させる方向に転換することとし、7月に年間計画の見直しを行った。見直しのねらいとして生徒が経験する「探究サイクル」の数を増やすこともある。本校の総合的な探究の時間は探究サイクルを１年間に１度回すスタイルであったが、島根県の津和野高校や隠岐島前高校の視察において両校が生徒に探究サイクルを幾度も経験させていることがわかった。これを受けて、本校でも探究サイクルを数回経験できるカリキュラムへの変更が断行された。以下に示したものが、変更された今年度の年間計画である。

月	時数	内容
4月	2	プレゼンテーション
	2	ブレインストーミング・ＫＪ法
5月	2	情報リテラシー　　新聞記者講話　講師：山形新聞最北総支社長　斎藤　敏広氏
	1	ディベート
6月	3	ディベート
7月	1	ディベート
夏季		地域理解プログラム準備（新庄市の写真撮影）
9月	2	地域理解プログラム（研究とは　講師：東北芸術工科大学　岡崎エミ先生）
	2	地域理解プログラム（課題整理）
10月	3	地域理解プログラム（プレゼン／インタビュー）
	2	地域理解プログラム（情報収集・アイディア深化）
11月	2	地域理解プログラム（解決策検討）
12月	2	地域理解プログラム（プレゼン準備）
		2年次　課題研究／地域理解発展研究成果発表会見学
1月	3	地域理解プログラム（プレゼン修正・リハーサル）
2月		地域理解プログラム成果発表会（2／8）
	2	地域理解プログラム（レポート作成）

毎時の授業は山形県内の探究課・探究コース設置校に作成が指示されている『探究学習ノート』に沿って進められる。本校の『探究学習ノート』は総合的な探究の時間のテキスト兼ワークシートとなるもので、巻末の評価シートに記入することで生徒は毎時の活動の振り返りもできるようになっている。



【前期（４～７月）】探究スキルの習得

①プレゼンテーション

入学式後に実施された１年次の宿泊研修において取り組んだ。生徒たちは分析の手法としてのマッピング、情報伝達の手法としてのナンバリング、ラベリングを学んだ後にグループを作り、自分たちの出身中学校の特徴や自慢をクラスメイトに伝えるプレゼンテーションを行った。

入学式翌日であり、互いのことを知らない状態での活動となったが、相手に自分のことを伝えることができ、協働作業による仲間意識の醸成もできたことで最後のプレゼンテーションは大いに盛り上がった。

②ブレインストーミング・KJ法

入学前に聞かされたり、思いこんだりしていた「新庄北高あるある」を生徒たちに列挙させ、それらを分類・整理することで新庄北高校のイメージと実態の差異を具体化させた。生徒たちがまとめてくれたＫＪ法を教員が見ることで、本校が校外の人々にどのように見られているのかを確認することができ、授業や生徒指導、校外へのＰＲを改善するうえでの情報を得ることもできた。

③情報リテラシー

情報を受信・発信するうえでの注意点を理解させることを目標に実施した。今年度は山形新聞社最北総支社長である斎藤敏広氏を招き、公正な新聞記事を書く上での留意事項を説明していただいた。数度にわたる構成を経て、新聞が各家庭に配られるという新聞製作の過程を知ることで、生徒たちは情報発信をする際には情報の吟味と情報の受け手を想定しておくことの重要性を学んだ。講演後には生徒に新元号「令和」について書かれたインターネット、週刊誌、新聞記事の文章を読み比べさせ、各文章のメリット・デメリットや特徴について分析した。

④ディベート

情報収集力と分析力、論理的思考力の向上をねらいとして実施した。なお、今年度のテーマは「高

齢者の自動車運転免許返納を義務化すべきである」と「外国人労働者を受け入れるべきである」とした。昨年度は4時間での授業展開としたが、生徒が収集した情報を整理し、論理化する時間が不十分であったことから、今年度は5時間の構成となっている。1 時間目はオリエンテーションとしてディベートを行う目的とその流れについての説明とテーマ発表を行った。2 時間目では事前に収集した情報を分析・整理することで立論を作り、生徒たちは立論のみの簡易ディベートを経験した。3時間目では反駁のみの簡易ディベート、4時間目に立論と反駁の修正を行わせることで論理の精緻化をはかった。5時間目でテーマごとにディベート決定戦を行わせたが、生徒たちは自分たちの意見を述べることに終始し、相手の意見に対する反論を行うことができていなかった。このことで相手の意見をよく聞き、不明瞭な点や矛盾点に気づき、指摘するという「質問力」不足が浮き彫りとなり、今後の学習活動において特に向上させる必要がある能力となることがわかった。

ディベートで発言する生徒

【後期】地域理解プログラム

前述した通り、今年度は生徒たちに「地域の可能性」に着目させることをねらいとして「新庄市でできること」を探究していく学習活動に軌道修正した。これはカリキュラム開発専門家である東北芸術工科大学の岡崎エミ先生と本校探究推進課長の談話の中で組み立てられていったアイディアである。主な修正のポイントは次の3点である。

①探究サイクルを反復経験させる

地域協働の先進校の実践例を見ると、「課題設定→情報の収集→整理分析→まとめ表現」といった探究サイクルを 1 年間のカリキュラムの中で何度も生徒に経験させていた。これと比較して、本校のカリキュラムは 1 年間で探究サイクルを 1 回転させるだけであり、先進校と比較した場合、生徒の探究スキルを十分に伸長させることができていない。そこで、1学期を“ファースト・サイクル」、2学期前半を「セカンド・サイクル」、2学期後半から3学期を「サード・サイクル」とし、探究サイクルを1年次で3回経験させることとした。

ファースト・サイクルは教員主導のもと、生徒に「課題設定→情報の収集→整理分析→まとめ表現」の探究サイクルを経験させる。2学期前半では生徒が自らテーマを設定し、探究サイクルを回す。それに対する評価を受けて、セカンド・サイクルの内容を振り返る。2学期後半からはセカンド・サイクルの評価を基にして、より深い考察とアイディアの実現に向けたサード・サイクルの学びを展開する。

②地域のマイナス面ではなく、プラス面に目を向けさせる。

新庄・最上地域の課題は非常に多い。高齢化・少子化・財政難をはじめとして多岐にわたる。確かにこれらは解決しなければならない問題であるが、多種多様な地域課題を突き付けられ、

大人でも解決できないこれらの課題の解決を求められることは高校生にとってはストレスである。課題を解決しなければならないという重圧、試行錯誤して考えだした解決策に対する大人の厳しい指摘は生徒の探究心を潰えさせてしまう危険があると考えた。

そこで、今年度は「新庄市でできること」を自由に発想させた。課題解決がゴールではなく、今目の前にあるものをより良くする方法を考えることがゴールである。これによって生徒は気楽に探究活動に取り組むことができるようになると考えた。

③頼れる大人がいることに気付かせる

昨年度、自治体や団体の方々が課題提供者と相談者を兼ねる面があり、地域の大人の意見を取り入れることで、成果発表会では具体的で効果の見込める提案ができていた。高校生にできることには限界があり、大抵の生徒の探究はそこで終了してしまうのだが、大人の力を借りることで探究を進められることもある。

ジモト大学においても生徒たちは地域の大人とつながる機会を得る。これに加えて、地域の人々に地域理解プログラムに参加してもらい、生徒たちが自分たちのアイディア実現に協力してくれる“探究パートナーとしての大人”を見つけ出せるようにする。

以下は、ここまで述べたねらいに基づき、実践した取り組みを紹介する。

①夏季休業

生徒を出席番号でグループ分けし、全部で 40 グループを作らせた。グループごとに「テーマ」を設定させ、夏季休業中に新庄市内で気になる場所の写真を撮影しておくことを指示し、夏季休業明けの地域理解プログラムの最初の授業でグループ内共有を行うことを伝えた。

②研究とは

本事業のカリキュラム開発専門家である東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科学科長の岡崎エミ先生による講演と夏季休業中に撮影した写真データのグループ内共有を行なった。

岡崎先生からは学力の定義が変わり、知識量で優劣がつく時代ではなくなっていること、20 歳ごろまでに「学び方」を学ぶ経験を重ねておかないと変化の続く未来社会では生きていけなくなることが生徒に伝えられた。

後半の写真共有では「新庄市には赤い看板が多い」、「新旬屋（ラーメン屋）の金色のトイレ」などの教員が知らない、気づくことができない新庄市内の魅力の情報交換に生徒たちは意欲的に取り組んでいた。

③課題整理

今年度購入したパーティションホワイトボードを利用して、生徒たちはグループ内で共有した写真データを分類・整理する作業に取り組んだ。生徒たちの対話が非常に活発となったが、これはパーティションホワイトボードの導入によって、付箋に書いた「できること」・「わかったこと」をＫＪ法の手法で分類・整理し、ラベリングの手法で「何ができるのか」・「何がわかったのか」を明確にすることで、焦点化した対話ができたことが要因であると考えている。

写真データからできることを考える

④プレゼン／インタビュー

コンソーシアムに協力を依頼し、地域の官公庁・企業の方 31 名を講師として迎え、生徒と地域の大人による対話を実施した。生徒たちはここまで考えてきた「新庄市でやってみたいこと」・「新庄市でできること」を提案し、大人は生徒たちの意見に対するアドバイスと自治体や企業としての業務、地域人として取り組んでいることを伝えた。対話は名刺交換・自己紹介 2 分、講師が自分の仕事について説明 4 分、生徒が自分たちのプランを説明 4 分、対話 5 分の 15 分 1 セットを 6 回行う形式をとった。生徒のプランを実現するための協力を提案してくれた地域の方もおり、生徒たちは自分たちのアイディアに確かな“手ごたえ“と”支援者“を得ることができたと言える。

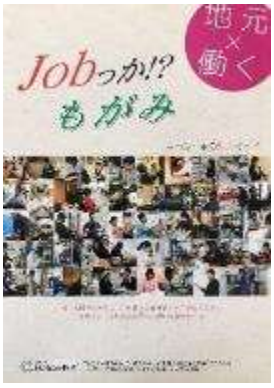
31 名の講師の方々

対話は名刺交換から

生徒と大人の相互プレゼン

⑤情報収集・アイディア深化

前時における地域の方との対話で得られた情報に加え、最上総合支庁が発行している冊子『job っかもがみ』を活用して、地域の大人たちが取り組んでいることから自分たちのプラン実現に活かせそうな情報を増やす活動である。生徒は多様な観点から自分たちのプランを見つめることで、プランの修正と発展につなげていった。修正したプランによって新庄・最上地域に与える影響・変化についても考察させたが、この段階で生徒は自分たちの探究活動が地域発展に寄与する可能性を実感し始め、グループ内での対話が一層活発なものとなっていった。



また、グループ外の意見も集めるべく、自分たちのプランをまとめた用紙を教室前の廊下に掲示し、用紙を見た人が付箋にコメントを書き込めるようにした。次回の「情報整理」において、グルー

プ外の第三者的意見から活用できそうなものを取り入れさせるためである。

⑥情報整理

プレゼンテーションに向けての準備である。一次発表会のプレゼンテーションは６枚の紙芝居による紙芝居プレゼンテーション（以下ＫＰ法）で行わせ、その構成は以下の通りである。

１枚目：グループ番号・グループメンバーの名前・発表タイトル

２枚目：写真を撮ってわかったこと、自分たちのやりたいこと「Ver.1」を記入させる。

３枚目：大人の方々からいただいたアドバイスをまとめる。『job つか最上』から得た、地元企業で行っている効果的な取り組みをキーワードでまとめる。

４枚目：自分たちのやりたいことをマトリクス（縦軸：独自性、横軸：実現性）でまとめ、よりよいプランにするために絞り込んだ対象や範囲を提示する。

５枚目：自分たちのやりたいこと「Ver.2」を記入させ、「ver.1」と比較してどのように改善したのかを口頭で説明できるようにする。また、プランを実行することで期待できる効果とその理由も説明させる。

６枚目：プランを実現するために、自分たちが着手すべきこと、地域の大人に協力してほしいこと、必要となる条件をまとめる。

着々と進むプレゼンづくり

生徒には作成用ワークシートに沿って作業を進めさせた。マーカーを使っての紙芝居作成の様子を見ると、協調したい部分の文字の色・太さ、補足資料として図や写真を用いるなどグループ毎の創意工夫が見られた。特筆すべきは自分たちのプランをインスタグラムにアップし、世界中から意見を集めようとしたグループが現れたことである。なお、インスタグラムを見た新庄市商工観光課の方が興味を持ち、生徒に話を聞きたいという連絡が学校に寄せられている。

⑦プレゼンテーション

リハーサルは教室内で行われた

作成したプレゼンテーションをグループ同士で相互評価させ、コメントを参考にしてプレゼンテーションを修正、最終リハーサルに取り組ませた。成果発表会を目前にした段階になって、生徒から「もっと調べたい。」、「まだ満足できない。」、「また一緒に研究しようよ。」という声が聞こえてきたことに教職員は驚かされた。中には次年度の課題研究の見通しを立てている生徒もおり、主体的な姿勢で探究活動を進めていたことを実感することができた。12 月に 2 年次の発表を見学した経験から、どのグループも質の高いリハーサルができており、一度リハーサルした後に改善点をじっくり討議する様子も見られた。

⑧成果発表会

２月８日（土）に本校体育館において実施した。発表テーマ数は40。生徒は発表５分、質疑応答３分、リフレクションシート記入２分の合計10分のプレゼンテーションに取り組んだが、今年度の特徴としてスマートフォンを活用し、自分たちが撮影した写真を紹介したり、インスタグラムに掲載した画像を紹介したりするグループが見受けられた点がある。このような情報通信機器やＳＮＳの活用は今後も増えていくことが予想される。成果発表会には教育関係者、保護者、地域団体関係者など多くの来場者があった。２年次の成果発表会よりも来場数が多い状況は、新庄・最上地域に地域活性化に関心を持っている人々が多いことを示していると考えられる。

発表の様子

【令和元年度　地域理解プログラム　テーマ】

1	甘さが呼ぶ幸せを求めて	21	スーパー紹介
2	～そうだ！神社へ行こう～	22	最上公園を活用して、子ども向けフリーマーケットをしよう!!
3	しあわせのふり～Wi－Fi	23	新庄一詳しいラーメンマップをつくる！
4	昔からある店と最近の店の違い	24	発見！新庄の輝き
5	キラキラ　ラーメンマップ	25	インターネットを用いてなくさないグルメスタンプラリー
6	家族みんなでたねてけろ	26	世界一効率の良いラーメン情報の集め方
7	拉麺道	27	新庄のラーメン食べ比べ
8	制服改革	28	とりもつをここから～作るか　食べるか　恋するか～
9	新庄の自然 with かむてん	29	フォトコンテストで新庄に活気を!!
10	新庄の活気を取り戻す	30	映えスポット探索ツアー
11	外国人観光客に向けた新庄祭りＰＲ	31	かむてんを通して新庄市を PR
12	映えるラーメン	32	新庄の自然をもっと多くの人に知ってもらおう！
13	新庄市を盛り上げよう	33	寺を楽しいイメージに！
14	新庄のちょこっとした良い風景	34	新庄市クロスワード with１００円商店街
15	新庄市ラーメン booklet～ラーメン王２０２０	35	Do you love Kamuten?
16	伝承野菜を広めたい！	36	めざせ１万回！１０代に告ぐ本気の新庄 PR 動画
17	一度行ったらハマる！！美味しさの沼	37	おいしい Wi-Fi
18	新庄市にあるラーメン屋についてのマップを作ろう！	38	ガソリンスタンドを利用して地域を発展させよう
19	新庄エンジョイマップを作ろう！	39	ラーメンフェス in Shinjo
20	地元密着型!!ラーメンマップを作ろう！In 新庄	40	娯楽施設の設置

⑨レポート作成

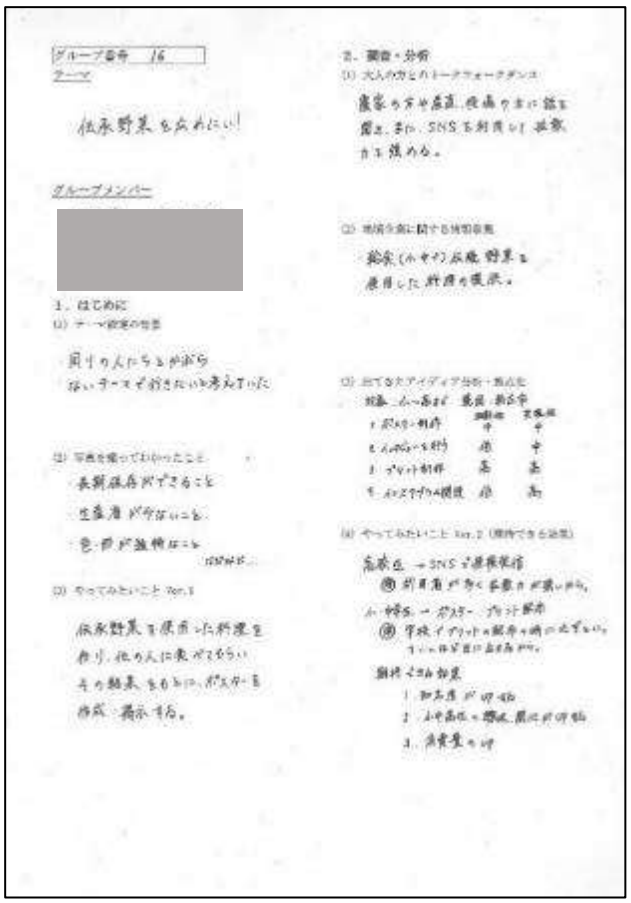
探究活動の成果をレポートしてまとめさせている。このレポートは次年度の地域理解プログラムにおいて１年次生がテーマ設定をする際の参考資料となる他、２年次探究コースの生徒が地域理解発展研究のテーマ設定、先行研究調査などにおいて活用することができる。本レポートの内容を研究材料の一つとすることはもちろん、継続研究をすることも可能である。

今年度は今後の研究につながるレポートとすべく、昨年度から以下のような変更を加えている。

昨年度のレポート（１枚）	令和元年度のレポート（2 枚）
【項目】 ・タイトル ・考えたい課題 ・訪問先 ・（訪問先の）業務概要 ・（訪問先の）効果的な取り組み ・提案する解決策 ・期待できる効果・実現可能性 ・自分たちの解決策を実現するために ・研究を深めるために（リフレクションシートより）	【１枚目の項目】 ・テーマ ・グループメンバー ・１　はじめに （１）テーマ設定の背景 （２）写真を撮ってわかったこと （３）やってみたいこと Ver. １ ・２　調査・分析 （１）大人の方とのトークフォークダンス （２）地域企業に関する情報収集 （３）出てきたアイディア分析・焦点化 （４）やってみたいこと Ver. ２ （期待できる効果） 【２枚目の項目】 ・３　考察 （１）これまでわかった点・うまくいった点 （２）まだわからない点・うまくいかなかった点 （３）次にやるべきこと・今後の研究の方向性 （４）後輩へのメッセージ ・４　謝辞 （１）お世話になった外部の方々へ （２）頂いた名刺の連絡先（企業名・お名前）

例年であれば、期限まで提出できないグループが多く、生徒に提出を促さなければならなかったが、今年度の提出状況は非常に良く、２月２９日の締め切りまで提出できたグループは４０グループ中３８グループであった。提出できなかったグループからは「完成していて家に置いてきてしまった。」、「２枚のうち１枚を忘れてきてしまった。」という申告もあり、ほぼ完璧な提出であったと言える。この結果には前向きな姿勢で探究活動ができたことが影響しているのではないだろうか。

【地域理解プログラムのレポート】



グループ番号 16

テーマ

伝承野菜を広めたい!

グループメンバー

[redacted]

1. はじめに

(1) テーマ設定の理由

身近な人にちょっとかぶらないテーマで好きだいと考えていた

(2) 写真を撮っておかったこと

長期保存ができること

生産量が少ないこと

色・形が独特なこと

(3) やってみたいこと Ver.1

伝承野菜を使用した料理を作り、他の人に食べてもらい、その結果をもとに、ポスターを作成・掲示する。

2. 調査・分析

(1) 大人の方とのトークウォークダンス

農家の方や農業、飲食の方に話を聞き、また、SNSを利用して伝承力を強める。

(2) 地域全体に関する情報収集

鈴家(かやの)伝承野菜を使用した料理の提示。

(3) 出てきたアイディア分析・絞込

対象	小一高学年	農民	新名中
		地域住中	宮崎県中
1. ポスター制作		低	中
2. スタンプラリー		低	中
3. クイズ制作		高	高
4. ハンドクラフト関係		低	高

(4) やってみたいこと Ver.2 (実行できる企画)

高校生 → SNSで情報発信

理由 前年度が多く参加者が少しかな。

小・中学生 → ポスター・クイズ制作

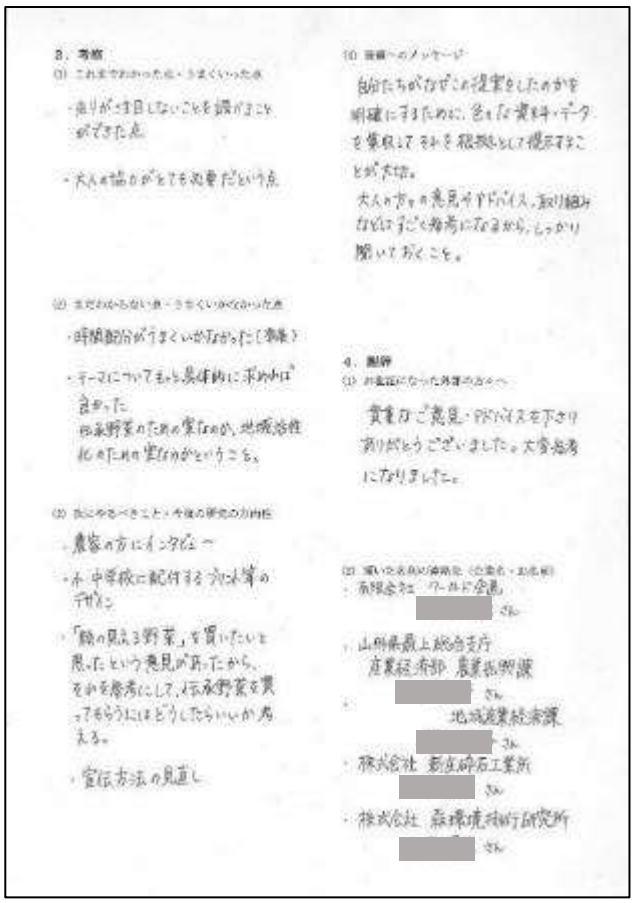
理由 学校イベントの配布や掲示のためもいい。クイズは学習にもなるから。

期待できる効果

1. 知名度が向上

2. 小中高校・地域・農民が仲良

3. 消費量の増



3. 考察

(1) これまでわかったこと・うまくいったこと

・通りが注目しないことを調べることができた点

・大人の協力がとても必要だという点

(2) まだわからない点・うまくいかなかった点

・時間配分がうまくいかなかった(準備)

・テーマについてもっと具体的に求めれば良かった

伝承野菜のための実践なのか、地域活性化のための実践なのかということ。

(3) 次にやるべきこと・今後の研究の方向性

・農家の方にインタビュー

・小・中学校に配付するクイズ等のデザイン

・「動の見える野菜」を買いたいと思ったという意見が多かったから、それを参考にして、伝承野菜を買ってもらうにはどうしたらいいか考える。

・宣伝方法の見直し

(4) 後輩へのメッセージ

自分たちがなぜこの提案をしたのかを明確にするために、色々な資料・データを収集してそれを根拠として提示することが大切。

大人の方々の意見やアドバイス、取り組みなどはすごく参考になるから、しっかり聞いておくこと。

4. 謝辞

(1) お世話になった外部の方々へ

貴重なご意見・アドバイスを下さり、ありがとうございました。大変参考になりました。

(2) 聞いた名前の確認 (企業名・お名前)

・有限会社 ワールド空港 [redacted] さん

・山口県農林水産部 農業振興課 [redacted] さん

・ 地域産業経済課 [redacted] さん

・株式会社 新産砕石工業所 [redacted] さん

・株式会社 森環境科学研究所 [redacted] さん